

Title	L・ マルソン著 中野善達・ 南直樹訳『野生児：その神話と真実』
Sub Title	Lucien Malson (translated by Y. Nakano and N. Mhami), Les Enfants Sauvages ; Mythe et Réalité
Author	霜野, 寿亮(Shimono, Toshiaki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1978
Jtitle	法學研究：法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.51, No.2 (1978. 2) ,p.110- 113
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19780215-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

L・マルソン著

中野善達・南 直樹訳

『野生児』

——その神話と真実——

一、本書はフランスの社会心理学者 Lucien Malsion の著わした Les Enfants Sauvages : Mythe et Réalité (一九六四年) が訳出されたものである。

二、人は自分自身をみつめるとき何を思うのであろうか。人はよく、「自分自身になりたい」とか「自分自身の生き方を正直に生きてゆきたい」とか言う。人がそうした考えを持つとき、各個人にとつて自分自身とは一体なんであるのだろうか。自分は自分だけでしかないゆえに自分にしかわからぬ何かがそこにあるのだろうか。そうして、すべての個人に固有の自分があるのだろうか。いまさかんにアイデンティティ「の危機が」問題にされる。ある人が、自分が自分であることの固有性なり証しは、さらにはある一群の一員である和自己判定する根拠はどうして得られるのであろうか。それは社会化の過程によるのであり、各自を照射した外的状況がその人なりの

自分を形成してきたのだと公式的に答えることはできる。しかしながら、自己が自己であること、あるいは自分が自分を社会内の一個人であると感じ識することの根源はどこにあるのかという疑問は残るのではなからうか。この問いかけは、いつ人間が個人になつたのかを問うことにはかならない。

広い意味での社会学と政治学を今日ささえている主要理論のひとつは行為の理論であり、それに基づく構造機能分析ないし体系論である。これら理論の論理的問題点は、社会の形成そのものを説明できない点にある。機能主義的諸理論に向けられた、社会変動を説明しえないではないかという周知の批判は、機能主義が社会の生成を説明しえないことの批判に書き改められる必要がある。社会変動の処理を不可能にした原因とされる規範至上主義のより重大なる欠陥は、社会の生成を説明しえぬ点にこそ見出されねばならぬのである。規範とそれを支える文化が社会成員の行動と思考を拘束することとは厳然たる事実であるが、その文化は社会と共に発生したにちがひなく、文化をもつて社会の生成を説明することは論理的に不可能である。この両者の関係が解明されれば、社会変動の説明も自動的に処理可能となるのである。

社会の生成を考えると、まず社会なき状態を論理的に想定することから考えればよい。ここでは個人が個人だけでしかない状態が存在しているにちがひない。いや、個人と言うものも不正確である。ひとりの人間が多数いる状態と考えるべきであらう。その状態にある人間は自分をどのようにみているのであろうか。彼には今日の我

々が考える自己という意識はあるのだろうか。意識なり思考は社会と文化の相互融合状態のなかからいつとはなく生れ培われ堆積し、今日の個人が個人として生きているのである。最初の論理の設定よりこのように仮定すれば、社会なき人間の持つ意識は皆無であるかよほど限定されたものであるにちがいない。それでは、この彼が個人になる過程、換言して社会が生成されてゆく過程の根源的動因は何であろうか。この個人と社会と文化のすべての源泉となる動因は、人間そのもののうちに見出されなければならない。そのためには文化という衣服をはぎとつた裸の人間をみなければならぬのである。この点について文化人類学のはたした役割は大きく、西洋文化という衣服を持たない、別様の個人の存在をみせてくれた。これに触発されて裸の人間像を論理的に推論することも広範に行なわれ、科学的思考に多くの共有財産を残してくれている。だが、文化人類学が対象にしたのは未開といえども社会に住む個人であり、ここでいう人間ではなかつたのである。より人間に近き個人を観察すれば、人間の生の姿をかきまみることができ、個人を作りあげてゆく原動力を人間のうちに見出せるかもわからないのである。それには、社会からできるだけ隔絶した生活を送つた人を観察すればよいはずである。この条件は実験的に獲得されるものではなく、偶然の機会によらなければならない。だが、そうした状況下に置かれた人々の記録もかなり記されている。それは「野生児」の記録にはかない。

三、本書は「野生児の記録」と銘うって種々の文献が翻訳刊行さ

れているシリーズの第五番目にあたつてゐる。筆者は、著者についての事前の知識はなく、訳者あとがきによつて、「ボームン国立教育専門学校の教授で唯物弁証法に立脚している学者である」ことを知るのみである。本書の構成はというと、所謂人間性つまり個人の性格は遺伝により決定されるのか、それとも環境によつて形成されるのかを論点に、具体的事例でもつてこの論争に答えを導びき、その締めくくりとして野生児の記録に目を通すという筋書になつてゐる。逐次内容を簡単にみてゆこう。

「野生児と『人間の本性』の問題」と題される序章では冒頭から問題が鮮烈に提起される。「人間は本性ほんせいといつたものなどまつたくもつてゐず、生育史「歴史」だけをもつてゐるのだという考えは、やがて承認されるべき考えであろう」（七頁）。これが本書で展開されてゆく基本主題である。従つて、彼の考える人間とは、本能に基く「種」の先験的規定を受けない、つまり「種の遺伝」に依存することのない生物であり、習得された人間性により行動する生物であるということになる。それゆえに、人間社会からはみ出した野生児こそ、この基本的主張を確める素材を提供するのである。

第一章では「個人の遺伝と種の遺伝」とが検討される。ここでのテーマは「本性」の否定である。著者によれば、個々の人間には、各動物が行動の指図書として所有している本能に対応する意味での本性などありえない。各動物はその行動の仕方を決定してしまふ本能を遺伝的に継承するが、人間そうした本性なるものを遺伝的に受けつぐことはない。これは家系社会学や一卵性双生児と二卵性双生児の比

較研究をよく検討すればわかることである。一見、遺伝によるものと思われる親子や兄弟の類似性も、実は環境の共有に起因しているのである。しかも、環境は個人の行動を決定しているのではなく、(個人の)主体による働きかけを受けて、始めて行動の規定に作用しているのである。また人間というひとつの種を考えた場合でも普遍的な人間の本性なるものは存在しない。このことは各国家ないし各民族文化の生活様式が時間的にも空間的にも異なることから明らかである。人間と動物との間にある差異も、人間行動の規定因としては無視することができる。人間は動物と異なり、知能面では時間・空間からの自由、純粹な物的思考、統合の能力という特性を、感情面では規範の要請、相互の契約、贈答の行為という特性を有しているが、これらの特性は可能性として人間に与えられているのであつて、社会的環境との接触なしには開花しないのである。

第二章は野生児の記録の点検と紹介である。これまでに数多くの野生児の報告がなされており、そのうちには事実かどうか疑いものもあるが、確かに野生の人間の記録として信用できるものも多数ある。これら野生児に共通する特徴は、四足による移動と言葉を持つていないことである。それゆえ、野生児として発見される人間はすべて先天的な精神薄弱ないし知能に欠陥あるものなりとして片づける議論もあるが、それは誤りで、文化の剝奪が人間を野生の状態——動物ではないがゆえに本能に導びかれることもできず何事もし得ぬ状態——に止めているだけなのである。これは発見され保護された野生児の多くが、学習に最適な時期を逸しているために

非常に不十分ではあるが、言語を学習してゆくことから明らかである。また動物が人間を育てることなど信じられないという意見もあるが、そうした事柄を全く不可能事と決めつけることはできず信頼に足る幾つかの事例の報告があるとしている。

第三章では、著者の考え方を裏づけるために、最も信頼に値する野生児の記録が要約紹介されている。第一は、生れてからほとんどの期間(一七まで)外的世界との接触を絶たれ孤独のうちに育てられたカスパー・ハウザーの例、第二は、狼に育てられたアマラとカマラの例(発見時一歳半と八歳半)、第三は、最も完全なる孤独のうちに育つたと考えられるアヴェロンの野生児と呼ばれているヴィクトールの例である。著者はこれら野生児が決して精神薄弱などではなく、徐々に社会化されてゆくことを強調しながら紹介している。

四、本書は、野生児という言葉が意味するところ、およびその具体的事例を理解させる点ではすぐれており、その意味で野生児の記録の手引書ないし概説書として性格づけられてよい。そして、幾つかの事例の検討は、著者の主張——人間に固有の心的本性などない——を裏づけていると思われる。なぜならば、社会的人間との接触を絶たれた野生児達は、動物の文化を摂取するか、全く何もしえない状態に追いこまれているからである。しかしながら、著者は人間に社会化を受容する意欲のあることまでは否定せず、環境に働きかけその対応を受容する主体という概念を用意している。人間が文化を作り社会を形成してきた以上、人間のうちに何らかの能力ないし衝動の存することを論理的に仮定するのはごく常識的な見方で

あろう。だが、その際、構成概念の導入にあたつては十分な慎重さが要求されよう。構成概念は実体がないだけに厳密な概念規定をしておく必要がある。本書ではこの点がひとつ気になるところである。というのは、主体概念の導入が曖昧だからである。すなわち、「遺伝と環境とは……『主体』という『貫いて照らす光』……が組織し生じさせる、主体の弁証法の両極概念なのである」（四六頁）と述べられるだけであつて、主体と本性とのちがひ、主体のはたす役割、その輪郭については全く言及されていないのである。たとえ弁証法という枠はめられていても、これでは本性を否定しながら主体を設定することが説得力に欠けると言われても仕方がないのではないかと思われる。

さて、先に述べた筆者の関心領域からの感想を述べてみたい。一言で述べれば、個人が自分自身ないしは自我と思う内容は文化的所産であることが野生児達の記録によつても支持されてしまつたといふことである。他者との接触をなくした野生児達は、それぞれが生きた世界のなかでしか自分になれていない。彼らの要求は生理的要求の充足までもが、彼らの生活した環境に支配されていることを示している。人間が人間として、換言して自分が自分として生活している有様はつとに文化的なのである。しかれば人間は文化をどのようにして作りあげてきたのであろうか。筆者はこの点に関心があり、是非ともその過程を知りたいと思う。それは既述の如く、その究明こそが社会学と政治学に大きな理論的發展を約束すると信じているからである。しかしながら、本書に記された範囲内では野生児が文化

を創造している様子は見られない。その意味では期待はずれに終つたが、人間の基本的要求の充足の仕方については考えさせられる部分が多かつた。本書を手がかりにさらに詳しく野生児の行動に関心を移してゆけば、筆者の期待もかなえられるのではないかと思つてゐる。目的もなく読めば、ただの物語にすぎなくなつてしまふが、人間と文化のかかわりに関心を有する読者には興味の尽きることはない本書である。最後に訳文も平易であることを記して筆を置くことにする。（福村出版、四六判、一八二頁、一九七七年）

鼎 野 寿 亮